まれな形態をした甲状舌管嚢胞症例

兵 行彦・稲福 繁・石神 寛通
瀧本 勲・岩崎 博*

A Rare Thyroglossal Duct Cyst

Yukihiko Hyo, Shigeru Inafuku, Hiromichi Ishigami and Isao Takimoto

(Aichi Medical University)

Hiroshi Iwasaki

(Toki General Hospital)

A rare thyroglossal duct cyst in a 22-year-old male is reported. There were two cysts, one at the back of the right submandibular gland and the other above the right lobe of thyroid, which were connected through a single duct. The two cysts and duct were surgically resected. Histological examination showed a thyroglossal duct cyst.

Key words: thyroglossal duct cyst, branchial cleft cyst, congenital cervical cyst

はじめに

非定型的な頸部の腫瘍性疾患に遭遇した場合には診断、治療に苦慮することがある。今回我々は二胞性で両胞が管状に連結した甲状舌管嚢胞の一例を経験したので報告する。

症 例

患者：22歳，男性。

主訴：右頸部腫脹。

既往歴：小児期に右甲状腺上部の腫脹と排膿を繰り返した。

家庭歴：母が弁膜症で手術。

現病歴：1年半前より右頸下部の腫脹があり、他院で手術をすすめられた。平成2年2月、当大学分院耳鼻咽喉科を受診した。

現症：右頸下腺後方と甲状腺右葉直上にそれぞれ1.5×4.0 cm，1.0×2.5 cm 大の弾性軟の

腫瘍を触れた。境界明瞭で圧痛，発赤はなかった。下方の腫瘍の皮膚面には瘻孔跡とみられる針頭大の小孔があったが排液はなかった。

諸検査結果：血液検査，臨床化学検査はほぼ正常所見であった。他院撮影のCT(図1)では顎下部は2.0×2.0 cm 大の境界明瞭，充実性腫瘍陰影の所見で，一方エコー(図2)では嚢胞性の画像を呈していた。

経過：病歴，エコー所見より先天性嚢胞性疾患が考えられたため，平成2年3月12日全身麻酔下に摘出術を行った。

手術所見：術前の右頸部の写真(図3)で，左が頭側で，左の黒丸印が顎下部，右が甲状腺部である。顎下部の腫瘍上に正中付近まで切開をし，広頸筋を剥離すると右頸下，顎二腹筋腱上，右顎下腺後方に淡紅色の嚢胞があり，これは胸

鎖乳突筋前方，内頸動脈直上に位置していた。さらに正中付近の切開端から甲状腺部の腫瘤上へ切開を加えると，下方へも管状に連なり甲状腺右葉直上で嚢胞を形成していた。同上皮膚に瘻孔が開口しており，一塊として摘出したが，

上部の嚢胞から下咽頭への開口，連絡は確認できなかった。周囲との癒着は少なく剝離摘出は容易であった。

肉眼的所見：嚢胞部を切開した摘出物の写真(図4)で左方が頭側である。全長11.5cmで，切開すると頭側嚢胞には茶褐色，尾側嚢胞には黄緑色の粘液が貯留していた。

病理組織検査：頭側の嚢胞内には移行上皮がみられた(図5)。管状の部分は管の周囲に横紋筋組織，膠原組織，脂肪組織があった(図6)。尾側の嚢胞内には多列線毛上皮があり，一部に扁平上皮，皮膚付属器を認めた(図7)。甲状腺組織，リンパ組織はいずれの部位にもみられなかった。

術後経過：経過良好にて術後11日で退院し，その後平成5年12月まで再発を認めていない。

図1

図2

図4

図3

図5

考 察

甲状舌管嚢胞は甲状舌管の遺残組織より発生するとされている。甲状腺原基は甲状舌管となり、頸部正中を下降し甲状腺を形成する。甲状舌管は胎生 6 週以後に形成される舌骨により上下に二分され、上皮と管腔は消失するがこの消失機転に異常が起こると嚢胞形成の原因となり感染を起こしたり、切開、穿刺を繰り返すと瘻孔となる。

発生部位は舌骨下部の正中線上に発生することが多いが、Deane ら¹⁾によると正中が61%、右側15%、左側24%としている。Biley²⁾は左、右側よりの発生を甲状舌管の側枝からのものと推定しており、また坂倉³⁾は上方は舌盲孔から下方は胸骨上窩まで、正中線上に限定するとは限らず、両側胸鎖乳突筋の前縁までの範囲に発生しうるとしている。

図 6

図 7

組織学的には甲状舌管嚢胞や瘻孔の内壁は一般に円柱上皮か線毛上皮であり、炎症をともなうことにより移行上皮から一層、重層の扁平上皮に化生するとされている⁴⁾⁵⁾。また、同嚢胞での甲状腺組織の存在は北村ら⁶⁾では25.9%、平野ら⁷⁾は36.4%、野津ら⁸⁾は27%認められたと報告している。しかし、甲状腺組織が認められない例も多い。

この症例の発生部位を考えると、尾側の嚢胞は甲状腺上にあったものの、頭側の嚢胞は胸鎖乳突筋上 3 分の 1 前方、顎下腺後方にあり正中線上より大きくずれており、術前は側頸嚢胞等との鑑別に苦慮した。しかし、病理組織検査では頭側の嚢胞内に移行上皮、尾側の嚢胞内には多列線毛上皮と扁平上皮が認められ、甲状腺組織はなかったものの甲状舌管嚢胞の所見に一致した。また、側頸嚢胞に特徴的なリンパ組織、皮様嚢胞にあるケラチン様内容物や皮膚付属器もみられずこれらは考えられなかった。さらに通常の発生部位から側方へずれているが、正中線上に限らず、両側胸鎖乳突筋の前縁までの範囲に発生しうること³⁾と組織学的所見から考えて甲状舌管嚢胞と診断した。

西畠ら⁹⁾は舌骨を上下から挟むような形で発生した二室性の正中頸嚢腫を報告しており、2室を呈した理由として初めに舌骨下に存在した嚢胞が急性増悪を繰り返し甲状舌管を介して舌骨上にも炎症が波及したとしている。当症例も現病歴から考えると、西畠ら⁹⁾と同様に最初は尾側の嚢胞が感染を繰り返し、皮膚に瘻孔を作った。その後急性増悪を繰り返して、甲状舌管を介し頭側の嚢胞へ波及したと推察される。当症例の甲状舌管は側枝とも考えられる。

その他複数の嚢胞があった例は西畠ら¹⁰⁾が上記例も含め 3 例、野津ら⁸⁾が 2 例のうち 1 例は舌骨上部と舌骨部に 1 個ずつ存在するものだが他 1 例の詳細は不明である。また蜷川ら¹¹⁾は舌骨下部に 2 個存在する例を報告している。Allard¹²⁾は収集した文献中舌骨の両側にある 1 例を記載している。当科でも当症例の他に舌骨

部と舌骨上部に1個ずつ存在する1例があった。しかし渉猟し得た検索範囲内では二胞あって一方の嚢胞が側方へ偏位している例はなかった。

ま と め

①右顎下腺後方と甲状腺右葉直上に嚢胞があり両嚢胞が管状に連結した甲状舌管嚢胞の一例を報告した。

②尾側の嚢胞が感染を繰り返し、甲状舌管を介して頭側の嚢胞へ波及したと推察した。

文 献

- 1) Deane SA and Telander RL : Surgery for thyroglossal duct and branchial cleft anomalies. *Am J Surg* **136** : 348~353, 1978.
- 2) Bailey H : Thyroglossal cysts and fistulae. *Br J Surg* **12** : 579~589, 1925.
- 3) 坂倉康夫 : 先天性頸部腫瘤. 耳鼻咽喉科頭頸部外科MOCK 2 顔面頸部腫瘤(斎藤等編) 112~121頁, 金原出版, 東京, 1986.
- 4) 執行作蔵 : 先天性頸部正中線瘻孔. *日耳鼻* **24** : 181~206, 1919.
- 5) 鶴田至宏 : 正中頸瘻. *JOHNS* **7** : 765~768, 1991.
- 6) 北村龍彦, 松山四郎, 鈴木則夫, 他 : 甲状舌管嚢胞の検討. *日小外会誌* **21** : 977~984, 1985.
- 7) 平野裕士, 篠原正徳, 川野芳春, 他 : 甲状舌管嚢胞の臨床的・病理組織学的検索. *日口外誌* **34** : 695~703, 1988.
- 8) 野津 長, 広田 裕, 林 英一, 他 : 甲状舌管嚢胞・瘻25例の経験. *鳥取医誌* **14** : 159~161, 1986.
- 9) 西嶋 渡, 竹生田勝次, 寺邑公子, 他 : 特殊な形態を呈した正中頸嚢腫の1症例. *耳喉* **55** : 393~397, 1983.
- 10) 西嶋 渡, 竹生田勝次, 野崎信行, 他 : 19例の甲状舌管嚢胞. *耳喉頭頸* **60** : 473~477, 1988.
- 11) 蜷川郁子, 別所和久, 松木優典, 他 : 甲状舌管嚢胞の2症例について. *日口外誌* **33** : 381~385, 1987.
- 12) Allard HB Remy : The thyroglossal cyst. *Head Neck Surg* **5** : 134~146, 1982.

(別刷請求先: 兵 行彦
〒480-11 愛知県愛知郡長久手町
大字岩作字雁又21
愛知医科大学耳鼻咽喉科学教室)